

新しい授業づくりの文化をつくる

令和5年9月1日実施
「能力ベースの授業づくり実践講座」通信
第13号 Cセット 授業研究会

授業者の提案



授業者
今村 美加 先生

本時(第1時)の展開

Cセット授業研究会 9月1日(金) @山田第三小学校

題材名:「せんりつのとくちょうをかんじとろう」(小学校の音楽3 教育芸術社)
授業者:今村美加先生 (山田第三小学校)

「能力ベース授業づくり実践講座」では、教材研究と授業研究会を1セットとして実施しています。今回は C セットの授業研究会を行いました。本時は、創造的プロセスを推し進める子供を目指し、創造的活動の学習プロセスに基づく授業提案でした。齊藤先生のお話では、「コンテンツ(内容)」ではなく、「能力」でカリキュラムを創るとはということか、「せんりつの特ちょうを感じとる」という目標に向かう子供たちの関わりについてのご講義いただきました。

Cセットから学ぶ 授業づくりのポイント

「目標に対する子供たちの関わり方を分析する」

→子供たちが推し進める創造的活動の姿から、本時の目標とどう関わっていたのか観点を明確にしながらかつ分析することで授業づくりの改善点が見えてきます。

「内容の深い理解」に能力は支えられている

→様々な主題のある音楽では、基礎基本と言われる内容を深く理解し丁寧に積み上げていく必要があります。それは、音符が分かるだけというだけでなく、働き、使い方、良さにまで深く理解をすることが大切です。

授業者の学び

創造的な学びは個々によって違う。学びのプロセスにおける『個別最適な学び』と『協働的な学び』の往還の手立てとして、言葉で表したり ICT を活用したりすることが大事である。他者からの意見を取り入れ共感することでどんどん良くなっていく。また、その題材だけではなく、次の題材に生かせるようにすること。歌詞に思いをよせたり、音程やリズムに情景を重ね合わせたりして、曲への理解を深めていくこと。児童が成長と成果の繰り返しや全体練習を重ね、目標とする音色に近づくように学習を進めることで、題材の資質・能力(感性)が育っていく。

Why なぜ学ぶのか

子供達が身につけるべき資質・能力は？

- 音楽に対する感性を高めながら、旋律に着目し、特徴を感じ取ったり、曲想を捉えたりする。
- 音と言語を関連させる。
- 友達の意見を取り入れながら、感受性を磨き音や音楽と豊かに関わり、どのような意味があるのかについて意識する。

What 何を学ぶのか

子供達の学習対象は？

- 創造的活動を支える3つの学習内容
 - ・『思いや意図を持つ』
 - ・『音楽を形づくっている要素を生かした活動』
 - ・『音楽的活動の成長実感』
- 楽譜を見て、音の高低やリズム、音価、反復に気付くこと。
- 曲を聴いて思いを持ち、旋律の特徴や、音色、速さ、強さなど曲の山を感じ取ること。それを言語化することで、歌詞の表す様子と感じ取った旋律の特徴との関わりを考え、他の意見と比較し、それを生かした歌い方や演奏の仕方を工夫させること。

How どのように学ぶのか

子供達の学習過程は？

時	学習内容・学習活動
1 本 時	『とどけよう このゆめを』 アとイの旋律の特徴について気付く
2	・リコーダーの階名と運指を確認し、演奏する。 ・旋律が反復することに気付き、旋律の特徴を確認しながら、音符の長さに気を付けて滑らかに演奏する。
3	『あの雲のように』 ・CD の演奏を聴き曲全体の特徴を感じ取る。 ・歌詞を読んで情景を思い浮かべながら、3拍子の拍子によって主な旋律を歌詞唱する。
4	・リコーダーの練習をする。 ・曲想に合うリコーダーの演奏の仕方を工夫する。
5	・リコーダーで息の強さやタンギング、フレーズに気を付けながら副次的な旋律を演奏する。 ・歌唱とリコーダーを合わせて演奏する。
6	『ふじ山』 ・曲全体の特徴を感じ取る。 ・旋律の上がり下がりなどの特報を理解し、楽譜を見て確認する。
7	・歌詞を大切に歌う。 ・「曲の山」を音程や気持ちの盛り上がる場所を探す。 ・旋律の特徴と曲想の関わりや、歌詞の内容と曲想との関わりについて話し合う。 ・歌って確かめる。 ・旋律の特徴を生かし、様子を思い浮かべながら歌う。

創造的活動

①思いや意図をもつ	②音楽を形作っている要素	③思いや意図をもつ	④音楽活動の成長実感
○題材名の確認 「特徴って何だろう？」 ○楽譜を見て気づくことを考えワークに書く。 「気付いたことは何だろう？」 ○CD の演奏を聴き、曲全体の特徴を感じ取りタブレットに入力する。 「感じたことは何だろう？」 	○アとイの旋律について、気付いたことや感じたことを、グループで話し合う。 「気付いたこと、感じたことが言語化できているかな？」 「友達の意見はどうだろう？」 	○アとイの特徴を生かした歌い方を確認して歌う。 「言語化したことが、演奏で表現できるかな？」 ○思いや意図に合う歌い方にする。 「もっと工夫ができるよ。」 	○タブレットで録音する。 「個々の記録を残してみよう。」 

論点

本時で、子供は思いや意図をもち、音楽を形作る要素を生かした活動をし、音楽活動の成長を実感できていたか。

齊藤先生のお話は裏面へ

音楽科の目標【学習指導要領 第2章 第1節 1教科の目標】

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

Why なぜ学ぶのか
子供達が身につけるべき資質・能力は？

What 何を学ぶのか
子供達の学習対象は？

How どのように学ぶのか
子供達の学習過程は？

1 能力ベースの学びとは？「コンテンツ(内容)」ではなく、「能力」でカリキュラムを創る

教材単元

「コンテンツ」で創るカリキュラム。教師の立場から教師が教えたいことの順に単元を創る。ドイツのツィラーが、教材単元という考え方を打ち出した。

経験単元

「能力」で創るカリキュラム。子供の立場で子供の経験をベースにしながら単元を創る。経験主義という、ジョン・デューイの考え方をベースにしたカリキュラム。

昔...単元という考えがなかった。
戦前まで...「教材単元」が構成され、教育課程が組まれる。
昭和26年...学習指導要領の試案。「教材単元」と「経験単元」の2つの良さを生かした教育課程を組む。
→「経験単元」では、子供の日常生活の中にある問題を解決していく必要性のあるようなテーマを設定
例:当時の算数の教科書「遠足」や「太陽の高さ」
→経験単元の問題点 教師が経験単元に慣れてない。
「漏れが生じるのではないか。」「こんなことをやって本当に役に立つのか。」「—這いまわる経験主義と揶揄された。
昭和33年...学習指導要領 経験単元は影を潜める。

平成10年...齊藤先生(当時 横浜の学校の研究主任)と奈須先生(当時 国立教育研究所)が能力ベースでカリキュラムを創る。

「子供が自らの有能さを用いて 創造的活動を推し進め、自らの能力の成長を自覚する」

学習指導要領

有能さ=見方・考え方

- ベース 「感性を働かせる」
- 見方 「音楽を形成する要素とその働きに目をつける」
→音符、記号、リズム感など
- 考え方 「自分のイメージや感情と関係付ける」
→音符の階段に目をつけて、イメージを高めていくなど

このような授業を繰り返していく中で、だんだん学年、学校種も上がっていき、より豊かな創造的活動ができる。まずはこの見方・考え方なるものを働かせる。

創造的活動は、小学校で言えば、音楽と図工と体育の表現活動。齊藤先生が25年前いた学校は、自分の考え、感情を表出するものは同じ枠組みにした。創造的活動は学習のプロセス=能力。

①歌う、演奏する、音を出す、演奏を聞く
→思いや意図をもつ

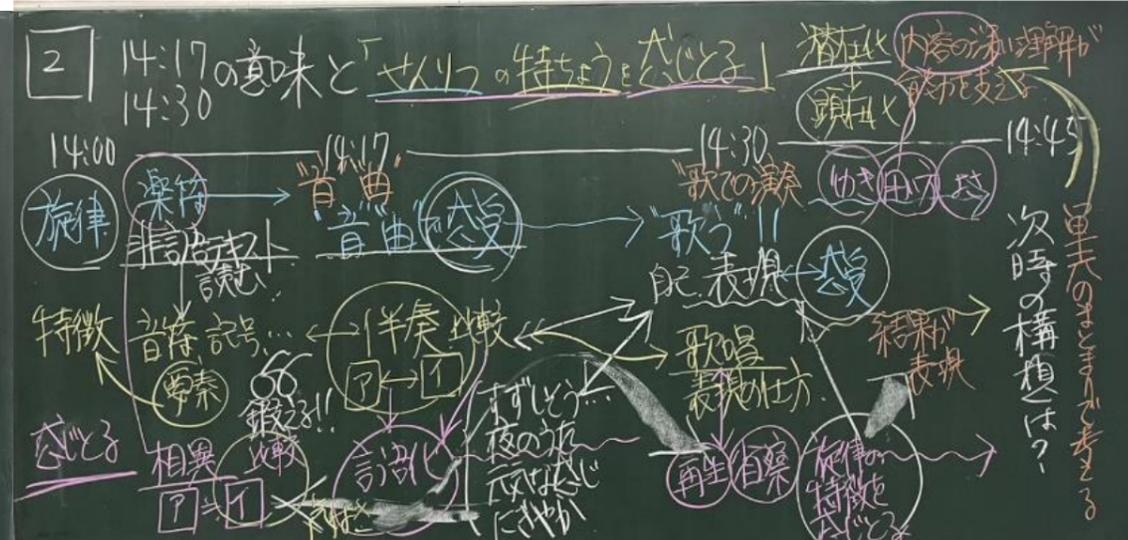
②感じたこと、表したいことの自覚
→音楽を形作る要素を生かした活動

③目的に合わせた表現の質の省察
→音楽活動の成長実感

要素を生かした活動が、材料や道具を生かした活動(造形的活動)になれば、図画工作になる。教科が違っても、その学びのプロセスや思考の進め方は変わらない。そのベースにあるのが「感性」。今日の場合は「感受」。感じ取る力。そこがものすごく大事。

最終的には自らの成長を自覚化していく。この自覚が、資質・能力の育成。見方・考え方を鍛えること。今回の取り組みでは、ボイスメモを使って。また、「思いや意図」では、画面上に多くの子供たちが、様々なことを書いていた。そういう意味では、能力ベースの授業づくりに向けたチャレンジが見て取れる。本当であれば最初に歌ったのを録音してもらえればよかった。次の時間と比較すれば、材料になる。大事なことは「子供はそもそも有能な学び手であること」。それを信じてあげることができるといい。よく「いや、うちの学校の子供は無理だわ。」「スモールステップで少しずつ教えて、次教えて、じゃないと無理だわ。」と聞く。それを言い続けると、ずっと教えてもらう子になってしまう。子どもたちが学習のプロセスを推し進められるようにしたい。国語であれば言語活動を、算数、数学であれば数学的活動を子供自身が回せるようにしたい。そして、彼らがその成長を実感できるようにしてあげたい。そのためにはエビデンスの共有が必要。子供たちが、「自分は今一体どんなことができるのか」尺度を与えていかなければならない。今日であれば、素晴らしい歌声で歌う児童の音源と比較していく中で、一定水準を子供たちに与えることが大事。今までの評価というのは、先生が自分の尺度を持っていて、それに到達したかしていないかを教師が判断していた。子供自身がある程度目標が見えていて、それに近づいていきたい、それを超えていきたい思いがないとうまくいかない。

2 14:17と14:30の意味と「せんりつの特ちょうを感じとる」



今日、興味深く拝見したのは2つの時間。14時17分と14時30分の意味と目標「旋律の特徴を感じとる」の関係。一連のプロセスの中で、「旋律」、旋律の「特徴」、特徴を「感じ取る」の3つの目標に対して、子供たちがどんな関わり方をしていったかを考えたい。

	14:00	14:17	14:30	14:45	
旋律	「楽譜」の提示 「楽譜」で旋律を「読む」 子供の中では、旋律は楽譜として提示されている。楽譜は非言語テキスト(言葉を使わないテキスト)である。つまり、子供たちは旋律を読んでいる。	「音」「曲」の提示 「音」で旋律を「感受する」 今度は、旋律を感受して、旋律を音で掴む。伴奏で感受している。音だけで楽譜の流れが見えてくるかという話になってくる。	「歌」での演奏 「歌」で旋律を「表現する」 自己表現するからこそ、「伴奏(音)」を比較して言語化することが重要になる。その元は「楽譜」。すべ手が繋がっている。感受したことを自らが表現している。		
特徴	どんな特徴が読み取れるか？ 「楽譜」で特徴を「読み取る」 音符、記号、休符...音楽を形作る要素の持っている特徴を見ている。例えば、3連符...「タタタ」という特徴がある。16分休符が並ぶ...「すごいテンポでピピピッと切れている」。	「伴奏」でアとイを比較する その時、何を「感じとる」か？	「歌唱」で特徴を「感じる」 子供たちは、表現の仕方や表現の違いで特徴を表すという仕事をしている。当然、歌い方によって表現の仕方は変わる。		
感じ取る	その時、何を「感じとる」か？ 「楽譜」を感じ取る 楽譜は極めてロジカルなもの。ア、イは、楽譜の表面上はあまり変わってない。それが大事どころ。子供たちは「アとイというのは似てるんじゃないかな。」と感じ取る。「比較してみるとどう？」「同じだね。」とどんでん返らせる。→見方を鍛える...「平素の明示的指導」と言う。	感じ取ったことを「言語化」する 子供たちは比較した結果を言語化した。 「涼しそう」「夜の歌」 ↔ 「元気な感じ」「賑やか」 ここで「この楽譜は賑やかで、こっちの楽譜は何か涼しげな寂しい感じがするね。どこにその原因があるのかな。」とフィードバックしたい。3年生だから、1、2個見つかったら○。楽譜での気づきが歌うことにつながる。	その時、何を「感じとる」か？ 自らの歌を感じ取る 自らの歌というもの省察が必要。その時に大事なことは、ただ感じるのではなく、旋律の特徴を感じ取る。歌がア、イの旋律の特徴に合っているか。歌った結果、それが本当に自分が感じ取った結果かどうか。今日は45分で録画して、次の時にやろうとなったが、2時間目はどうなるか。今度はどのレベルの特徴を期待するのか。感じ取るという内容は一体どうなのか。これを考えていかなきゃいけない。そこで大事なことは、単元のまとまりで考える。だから、次の教材でやることについて吟味も必要になる。		

音楽は、様々な主題があるので、多くの場合時期が飛んでやるのが多い。そうなった時に、その繋ぎをどうするか。子供は確かに有能な学び手ではあるけれど、それを丁寧に積み上げていくためには基礎・基本と言われる内容を確実に押さえていく必要がある。これを「内容の深い理解」という。内容の深い理解は、大きく3つ。1つ目は「働き」。2つ目は「用い方」。最後は「良さ」。こういったところまで理解できていないといけな。デクレッションとクレッシェンドはどんな時使うの？と問われれば、「だんだん元気になる時」や「だんだんに日が沈んでいくような時」などと言える子供にしたい。そうすれば今度は楽譜を読んだ時に、こういったことがどんどん言える子になる。これが「内容の深い理解」ということ。

●後半に1時間の流れを「旋律・特徴・感じ取る」の観点で解説していただいたことで、普段自分の授業で気を付けていることや考えていたことにつながるものを感じられ、とても参考になりました。(N先生)
●音楽もピアノを弾いたり、歌を歌ったりだけでなく、楽譜からも考えることができることに気付かれました。楽譜に対する作曲者の意図は、国語科の物語文などに似ているなど感じました。(O先生)

【編集後記】今村先生の音楽科の授業を通して「そもそも能力ベースとは何か」「授業を見るとはどういうことか」について問い直し、深く学ぶことができた。「教科を越えた学び」が実感できた講座でした。(文責:教育センター山笠)